

本間泰子
学籍番号：10S1110
所属：青山キャンパス
職種：保健師

「エビデンスを積み上げること」と「語り」と

看護職でありながら、ハンセン病の既往を持つ方から直接お話しをうかがうのは初めてでした。静まり返った教室で平沢さんの語りを聞きながら、若いころに読んだ遠藤周作の「わたしが・棄てた・女」を思い出しました。戦後のまだ貧しかった時代の小説で、ハンセン病の差別は過去のことと思ひこんでいました。インターネットを見て、平沢さんのお話のなかに出てきた井深八重さんがこの小説のモデルになったことを知りました。ハンセン病の暗く重い歴史の中で、光が射すような人が現れる。平沢さんもそのひとりだと思ひました。

エビデンスを積み上げても差別はなくならなかった

聖書の中に既にレブラ（≡ハンセン病）の記述があったと記憶していますが、それから2000年、人間が月に行ったり宇宙に滞在できるようになった現在までハンセン病の差別はずっと続き、日本でらい予防法が廃止されたのはつい15年前というのは驚きです。この長い間には、1873年にらい菌が発見されて遺伝病ではないこと感染力も弱いことがわかり、その後治療薬が開発され、差別に科学的根拠のないことがわかったにもかかわらず差別はなくなりませんでした。らい予防法そのものは空洞化していたようですが、それでも差別はなくなりません。差別がなくなってきたのは、法の廃止をきっかけにメディアが取り上げるようになってからだということでした。

語りによって差別はなくなる

ハンセン病の歴史とご自身の体験を語る中で平沢さんが私たちに伝えたかったのは、「うらみはうらみで返さない」「対立のなかでは差別は解消しない」「相手を理解することで、信頼関係が生まれる」「ハンセン病を糸口にすれば、他の差別問題の解決になるのではないか」ということだったと思います。この語りによって平沢さんに対し敬意を感じ、私たちは差別することなんてできないと思う。インターネットで得られたハンセン病の歴史を情報として知るだけでは人の心に響かないし、差別はなくなりません。

最後に平沢さんが話された「生きた歴史を社会に還元していくことの一環として、来年は多摩全生園の敷地内に保育所を作る。」ということばに、人間は弱いようで強い、素晴らしい存在だとあらためて思ひました。

平沢さんの語りを通して、「語り」の大切さを実際に体験できた授業でした。